

東京外国語大学
アジア・アフリカ言語文化研究所
要覧 1992



目 次

概 要

歴史と性格	1
組織	3
研究部門構成	4
職員	6
運営委員	8

研究活動

共同研究プロジェクト	9
国際学術交流	17
助手等の現地投入	20
共同研究員(公募)・大学院・研究生	21
言語文化情報の統合化	22
言語研修	23

施 設

電算機室	24
図書室	25
音声実験室	26

出版物一覧	27
-------	----

——表紙写真説明——

週末近郊への一家揃ってのピクニックは、ランの人びとの大きな楽しみのひとつである。お茶とお菓子をお相伴にあずかりながら、日本では希になった家族の暖かみを、通過者の私も十分に感じる事ができた（かみおかこうじ：1990年秋、イランのファールス州にて）

INSTITUTE FOR THE STUDY OF LANGUAGES
AND CULTURES OF ASIA AND AFRICA
TOKYO UNIVERSITY OF FOREIGN STUDIES

4, NISHIGAHARA, KITAKU, TOKYO 114

TEL. 03-3917-6111

FAX. 03-3910-0613

Cable Address: GENGOBUNKA TOKYO

概 要

歴 史 と 性 格

アジア・アフリカ言語文化研究所は、人文科学・社会科学系では、わが国ではじめての共同利用研究所です。共同利用研究所の使命とは、あらゆる種類の研究機関に所属する専門の研究者のために設備や資料を提供し、相互の接触や交流の機会をつくり、それによって研究の進展を促すことです。

戦後日本の復興が進むとともに、その運命がアジア・アフリカ諸国と深くかかわりあっていることが認識されはじめました。このような背景のもとに、昭和36(1961)年に日本学術会議がアジア・アフリカ言語文化研究所を設置するよう勧告しました。その後、各方面の理解と協力を得て、昭和39(1964)年4月1日、本研究所は東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足しましたが、当初は、3部門(言語文化、インドシナ、アフリカ)、研究員わずか9名の小さな研究所でした。本研究所の設置目的は、次のようにまとめられていました。

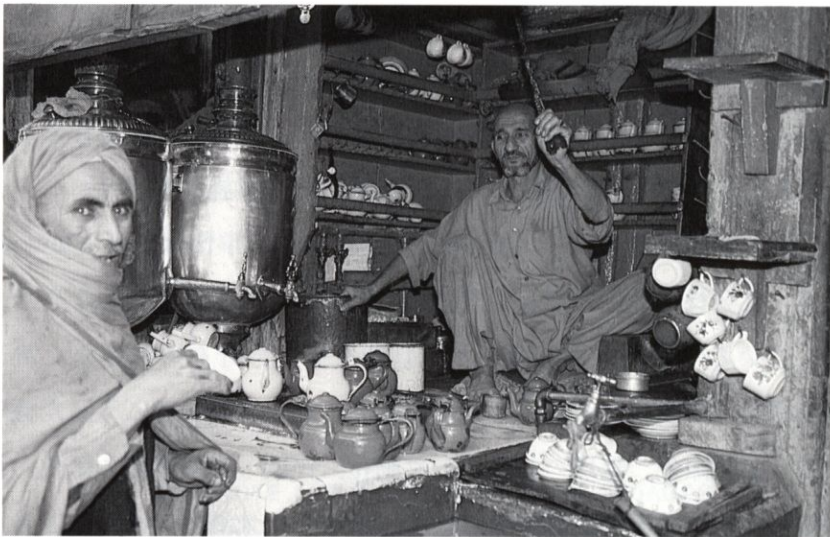
- 1) アジア・アフリカの諸言語、およびそれらを通じて、アジア・アフリカ諸地域の歴史・社会・文化を直接研究すること。
- 2) それらの言語による資料の利用を容易にするための辞典を作ること。
- 3) それらの言語修得を助けるため、言語研修を実施すること。

以後、四半世紀以上経て、本研究所をとりまく諸事情は大きくかわりました。人文・社会科学の分野でも、言語学、歴史学、人類学などのような、すでに確立している学問体系に依存した個別的な研究分野をのり越えた新しい学問・理論構築への要請が高まっています。学界におけるこうした機運は、近年における国際化、地域の枠組みの流動化、民族・宗教問題の激化、都市化現象の進展などの急激な世界情勢の変化および狭い地域的枠組みにとらわれない、より広域な視野にもとづく研究の必要性に対する認識の深まりなどと関連しています。一方、最近における情報処理技術の発達のなかで文字のみなら

ず、音声や画像の処理が可能になり、さらに、これらを個別の情報としてではなく、一つの情報ネットワークに統合化する研究が進展しています。

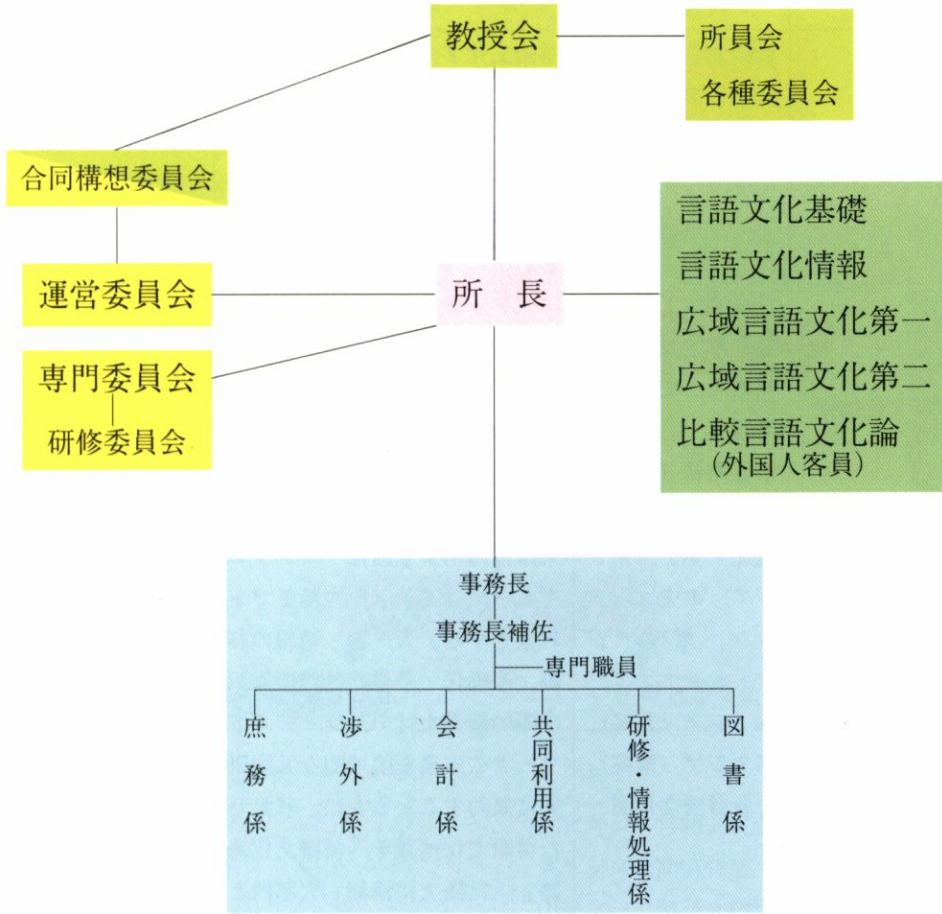
以上のような学問的・社会的要請，アジア・アフリカ地域の社会情勢の変化，科学技術の発達に対応して，研究部門を増設してきた本研究所は，昭和62（1987）年には，16部門（定員40名）に客員部門（外国人，定員2名）を加えた大きな組織に成長しました。そして，平成3（1991）年度には，言語を媒介として成立している文化を総合的に研究する学問である「言語文化学」理論の構築，広域的なフィールドワークや共同研究の実施，情報の統合化処理のための理論と方法の開発などをめざして，従来の16小部門・1客員部門（外国人）を，4大研究部門・1客員部門（外国人）に再編成しました。さらに，東京外国語大学では平成4年度より，従来の修士課程を改組し，新たに博士課程が設置されましたが，本研究所はこれを全面的にバックアップするために博士後期課程に15名（平成4年度）の教官が参加し，4名程度（平成4年度は3名）の学生を受け入れるなど教育活動にも力を注いでいます。

2年後に設立30周年をひかえ，わが国における言語文化研究の発展になお一層貢献し，かつ流動する世界情勢にすみやかに対応しつつ，わが国とアジア・アフリカ諸国との文化交流にさらにより積極的に寄与することが，本研究所所員一同の願いです。



ペシャワールはキッサハーニー・バザールのいわゆる「チャイハナ」。お茶の出し方は地域によってかなり変化する。ゆったり，ゆっくりお茶を飲みながら，お茶が入ってくる以前は，民衆はいったい何を飲んでいたのでろう——コーヒーは，お茶ほど民衆の手に届きやすかったわけではない——，と考えを巡らすのも一興である。（上岡弘二）

組 織



(1992年4月1日現在)

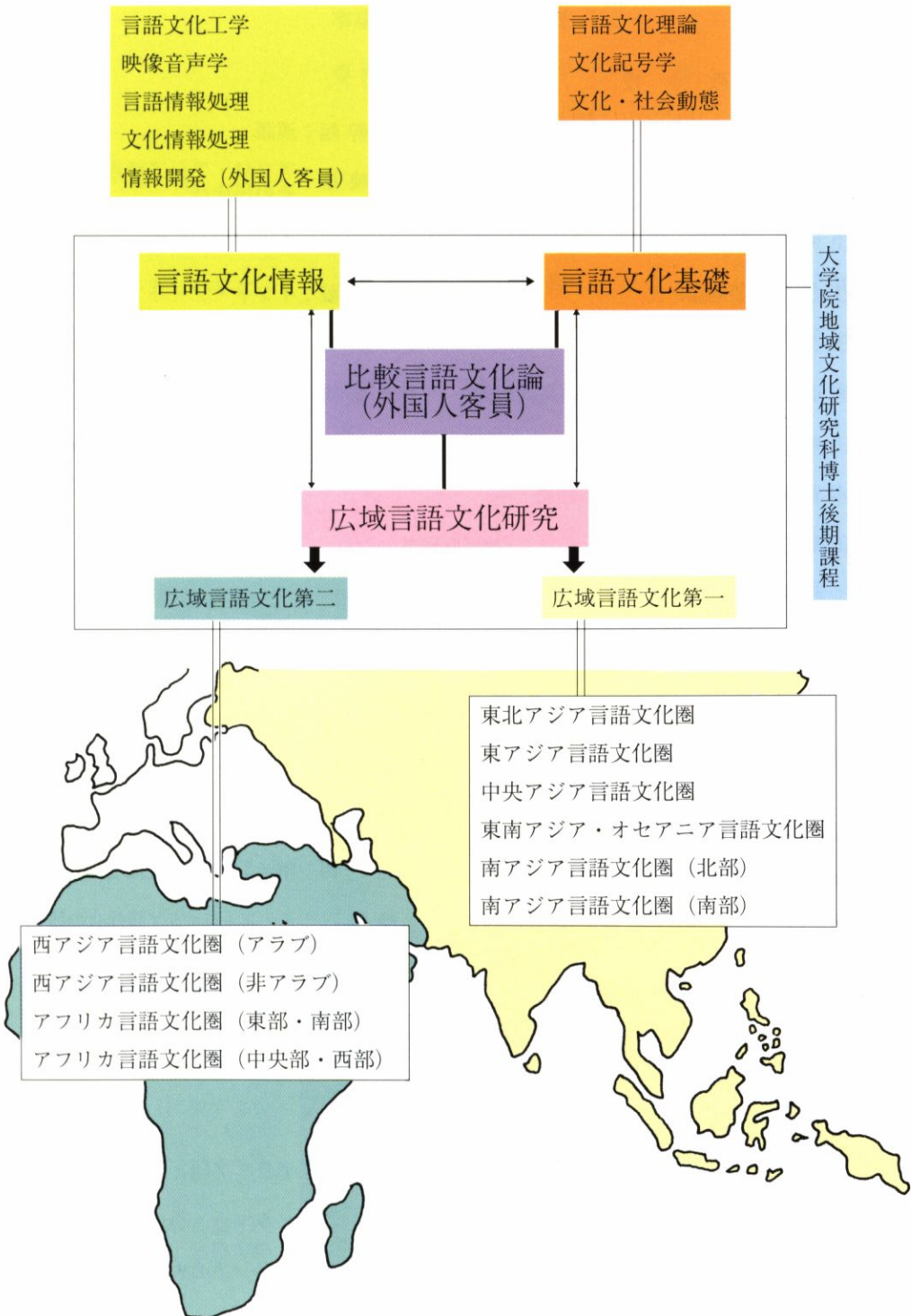
区分	教授	助教授	講師	助手	その他の職員	計
定員	(4) 17	17	0	8	28	(4) 70

()は外国人客員数を外数で示す

研究部門構成

部門名	研究分野	研究内容	所属研究者
言語文化基礎	言語文化理論, 文化記号学, 文化・社会動態	言語文化学の構築を図るためにアジア・アフリカの言語文化を比較・分析し, 歴史学, 文化人類学, 言語学など関連諸研究分野の成果を統合して理論化する。	川田, 家島, 山口 新谷, 水島, 高知尾, 中沢
言語文化情報	言語文化工学, 映像音声学, 言語情報処理, 文化情報処理 情報開発 (外国人客員)	アジア・アフリカの言語文化情報の分析・処理と新しい情報処理システムの構築, 及び情報処理した言語文化情報の提供, 共同利用・公開のための手法を開発する。	上岡, 坂本, 奈良 小田, 加賀谷 高島, 中嶋, 林 新免, 峰岸 外国人研究員
広域言語文化 第一	東北アジア, 東アジア, 中央ユーラシア, 東南アジア・オセアニア, 南アジア (北部), 南アジア (南部) の各言語文化圏	東は沿海州より西はフィンランドあるいはインド亜大陸までを対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究を行い, フィールドワークの成果を広域的な共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する。	池端, 石井, 梅田 大江, 岡田, 中村 ダニエルス, 内藤 中見, 松村, 宮崎 森, 栗原, 根本, 三尾
広域言語文化 第二	西アジア (アラブ), 西アジア (非アラブ), アフリカ (東部・南部), アフリカ (西部・中部) の各言語文化圏	イスラム, アフリカ言語文化圏を対象とする。人・物・情報の移動, 流動化・多様化に対応し, 学際的研究を行い, フィールドワークの成果を広域的共同研究に集約するとともに, 収集した言語文化情報を「言語文化基礎」・「言語文化情報」大部門との連携で分析する	永田, 中野, 日野 守野, 梶, 羽田, 松下, 黒木, 西尾
比較言語文化論 (外国人客員)		言語文化学の確立を図るために, 外国人研究者 (特にアジア・アフリカ諸国) を客員教授として招へいし, 共同研究を推進する。	龔煌城, L. A. Reid, H. P. Vietze, W. Yaek'olingo, B. B. Rajapwóhit

動態的なアジア・アフリカ言語文化学の構築をめざす研究部門構成図



職 員

所長 (併任) 教授 上 岡 弘 二

研 究 部

教 授

池 端 雪 浦 : フィリピン史における政治と宗教

石 井 溥 : 南アジアの人類学

梅 田 博 之 : 朝鮮語

大 江 孝 男 : 朝鮮語

岡 田 英 弘 : 東アジア史

上 岡 弘 二 : イラン語, イスラムの民間信仰

川 田 順 造 : アフリカ文化

坂 本 恭 章 : オーストロアジア諸語

永 田 雄 三 : トルコ史

中 嶋 幹 起 : 漢語

中 野 暁 雄 : アフロ・アジア諸言語およびその民族誌

中 村 平 治 : 南アジア現代史

奈 良 毅 : インド・アーリア諸語

日 野 舜 也 : アフリカ都市社会の比較研究

守 野 庸 雄 : 日本語・スワヒリ語対照研究およびス・ス辞典編纂

家 島 彦 一 : インド洋・地中海の海域史に関する基礎的研究

山 口 昌 男 : 文化記号論

助 教 授

小 田 淳 一 : 物語分析における計量的手法の開発

加 賀 谷 良 平 : 音響音声学, アフリカ諸言語

梶 茂 樹 : バンツー諸語, 言語人類学

新 谷 忠 彦 : 言語哲学

高 島 淳 : 言語情報処理とヒンドゥー教
クリスチャン・16~20世紀中国史における社
ダニエルス'会, 経済および技術

内 藤 雅 雄 : インド近・現代史

中 見 立 夫 : 内陸・東アジアの国際関係史

羽 田 亨 一 : サファビー朝文化史研究

林 徹 : トルコ語

松 下 周 二 : アフリカの言語

松 村 一 登 : フィン・ウゴル諸語

水 島 司 : 南インド近・現代史

宮 崎 恒 二 : オーストロネシア諸社会の研究

森 幹 男 : インドシナ比較文化史

助 手

栗 原 浩 英 : ヴェトナム現代史

黒 木 英 充 : 東アラブ近・現代史

新 免 康 : 中央アジア近・現代史

高 知 尾 仁 : 世界表象と象徴性

中 澤 新 一 : チベット仏教の人類学的研究

西 尾 哲 夫 : アラビア語・アラブ文化

根 本 敬 : ビルマ近・現代史

三 尾 裕 子 : 東アジアの人類学

峰 岸 真 琴 : オーストロアジア諸言語

事務部

事務長 安田 隆

事務長補佐 鈴木邦叔

専門職員 平井榮治

庶務係

係長 松本省三

文部事務官 元井洋一

文部事務官 高橋由紀

文部技官
(自動車運転手) 伊藤功一

会計係

係長 浅見義則

文部事務官 田中鉄哉

文部事務官 大島俊宏

文部事務官 岡田健一

用務員 植田カツエ

研修・情報処理係

係長 山本芳久

主任 今井健二
文部技官

文部事務官 中嶋弘子

文部事務官 山口登之

渉外係

係長 岡部久雄

主任 神田 環

主任 谷川かつ子

共同利用係

係長 田川富美子

主任 金井京子

文部事務官 津田貞子

図書係

係長 佐藤 剛

主任 中川陽子

主任 須郷知子

文部事務官 斉藤眞一郎

ザンジバルの市場の外側には、島の各地からのバスの発着場がある。中国のトラックの後部に木でつくった座席と枠がとりつけられ、ものすごい振動とかたいいすで、30分ものとおしりがすりむけるが、ザンジバルへの物資の運搬手段として重要な役割をはたしている。朝9時、野菜、バナナ、砂糖きび、薪などがはこびこまれ、運搬人夫と、物色する商人たちでごったがえす。

(日野舜也)



運 営 委 員

研究所の日常の業務の運営は、教授・助教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての本来の機能を適切に遂行するため、これとは別に運営委員会がおかれ、研究所の運営の基本方針などの重要な事項について、所長の諮問に応えます。運営委員には研究所の教授・助教授、および所外の学識経験者など、25名以内が委嘱されます。第14期（1991.1～1993.2）の運営委員は現在以下の通りです。

池 田 修	大阪外国語大学教授	祖父江 孝 男	放送大学教授
池 端 雪 浦	所 員		(国立民族学博物館名誉教授)
石 井 米 雄	上智大学教授 (京都大学名誉教授)	谷 泰	京都大学教授
伊 谷 純一郎	神戸学院大学教授 (京都大学名誉教授)	土 田 滋	東京大学教授
梅 田 博 之	所 員	長 島 信 弘	一橋大学教授
應 地 利 明	京都大学教授	中 根 千 枝	東京大学名誉教授
大河内 康 憲	大阪外国語大学教授	西 田 龍 雄	学術情報センター教授
川 田 順 造	所 員	本 田 實 信	名古屋商科大学教授 (京都大学名誉教授)
神 田 信 夫	明治大学名誉教授	護 雅 夫	中近東文化センター理事長 (東京大学名誉教授)
北 村 甫	麗澤大学教授 (東京外国語大学名誉教授)	矢内原 勝	作新学院大学教授 (慶応義塾大学名誉教授)
古 賀 正 則	一橋大学教授	山 崎 利 男	東京大学名誉教授
興 水 優	東京外国語大学教授	渡 部 忠 世	放送大学教授 (京都大学名誉教授)
佐々木 高 明	国立民族学博物館教授		
鈴 木 斌	東京外国語大学教授		



グルジア共和国の首都チフリスに近い村カンダに住むシリア正教会に属する人々。グルジア語のほか家の中では現代アラム語東方言も話している。
(1991年5月、中野暁雄)

研究活動

共同研究プロジェクト

共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。これまで数多くのプロジェクトが組織され、多様な研究成果をあげてきました。

本年度のプロジェクト名と各プロジェクトの研究代表者は次のとおりです。

言語文化基礎部門

多民族国家における異化・同化形態の比較研究 (水島 司)

いかなる社会も文化も静的な存在ではなく、他者との接触を経て現在に至ったのだという認識に立つとき、文化・社会の動的把握はもはや派生的な応用課題ではなく、一般理論を提供すべき基礎的分野として位置づけられる。本プロジェクトの目的は、そのような動態研究における一つの試みとして、多民族国家における異化と同化の形態を明らかにすることである。おのおの異なる専門領域に属する研究者を組織し、特定地域を集中的に研究することにより、異質な諸文化の接触によってもたらされる各文化自体の変容形態と、接触の結果、新たに生成されてくる文化形態に着目し、各文化のみならず、異化および同化の諸過程を明らかにする。それらの作業を通じて、異文化接触の一般理論を見出し、社会・文化動態研究への貢献を目指す。当面は典型的な多民族国家であるマレーシアを対象として、年数回の研究会を開催し、課題や方法についての議論を深めるとともに、現地調査にもとづいた研究成果を公刊する。(所員2名、共同研究員20名)

共同研究報告：マレーシア社会論集1, 2

「未開」概念の再検討 (川田順造)

「未開」の概念は欧米諸国で民族学をはじめとして19世紀頃から広く使用されるようになり、現在まで文化人類学など文化・社会科学諸分野で用いられてきたが、この概念の成立過程、含意するものの文化的背景、研究上の概念としての有効性等については十分な検討がなされていなかった。この研究計画では、文化人類学、民族学、民俗学、歴史学、哲学、国文学、人文地理学、音楽学、美術史、建築史、科学史、思想史等々関連諸分野の第一線研究者の参加を得て学際的な場でこの問題を検討する。それによって近代西洋で形成された概念を相対化するとともにそれをもととした日本人研究者の視点も対象化することを企図している。

今年度は、昨年度におこなった大文明と周辺文化をめぐる研究の総括をおこない、合わせて諸文化における秘密(結社)の問題を検討していく。成果は討論も含め、リポートから「『未開』概念の再検討」Ⅰ(平成元年)、Ⅱ(平成3年)とし

て刊行されたが、以下続刊の予定である。(所員6名、共同研究員47名)

現代世界の地域統合とエスニシティー (中村平治)

ここ数年来の世界的な激動は社会体制の相違を超えて従来の歴史学を含めた社会科学の諸分野での方法論や価値観の見直しを求めている。具体的には国民主権・民族自決・国民国家・連邦制度・地方分権といった諸問題が従来そのまま存続することは不可能であるといった新事態が生まれている。本研究は地域統合とエスニシティーという二つの基本問題を対象にして上述の“渦中に置かれた”諸問題へのアプローチを試みるものである。その内容としてはASEAN, SAARCを主要関心の射程内に置き、同時にECやソ連・東欧をも研究対象に組み入れたい。

- 1) まず、地域統合とエスニシティーに関して研究所に基本的な資料・文献を集積することを重視する。
- 2) また、各地域協力圏のなかの代表的と思われる事例を選択し、参加メンバーによる個別研究報告を予定する。
- 3) 当然のことながら、少数集団、または少数集団関係と把握されるエスニシティーの問題が地域統合との関連で検討される。
- 4) 「民族問題」が抑圧・被抑圧の契機を内包しているとすればエスニシティーの場合も同様であり、この点の歴史的な分析が重視される。
- 5) 本研究は3年間の継続を意図し、所内外の有志参加が期待され、一種の研究フォーラムであることが期待される。

(所員3名、共同研究員9名)

象徴と世界観の比較研究 (山口昌男)

アジア・アフリカ等の諸地域における説話、儀礼、身体活動(スポーツ)などを、文化記号学の観点からとらえ、通文化的ならびに通分野的学問再構築のための方法論的接点を探る。(所員4名、共同研究員24名)

アジア・アフリカ諸言語の総合研究 (加賀谷良平)

このプロジェクトはアジア・アフリカ諸言語研究の最も基礎的な総合プロジェクトである。すなわち、フィールドワークによって得た、なまの膨大な言語資料を、コンピュータを始めとするさまざまな情報機器を用いて分類・分析したり、またそれらの資料を諸研究者による多角的分析・資料統合(同系統言語間での比較・異系統言語間での対照)を通じて、言語理論を構築することを目的とする。具体的にはこれらの研究の基礎となるフィールドワークによって得られたアジア・アフリカ諸言語の資料分析すなわちそれらの文法・音韻構造の解明並びにその情報化のための会合を開き、研究発表と討議をおこなう。また、その成果は、刊行を予定している、共同研究プロジェクト報告(通称年報)一冊と文法便覧2冊に発表する。

(所員17名、共同研究員54名)

共同研究報告：アジア・アフリカ文法研究1～20

アジア・アフリカ文法便覧1972～

言語文化情報部門

言語研修 (中嶋幹起)

本年度に予定する事業および研究活動は次のとおり。

1. 研修講座：実施言語——東京会場：ネパール語、アラビア語（エジプト方言）
大阪会場：フィリピン語
2. 専門委員会2回（4年5月，5年3月），成果報告・検討のための専門委員・共同研究員合同会議1回（4年10月）。
3. 研修教材作成と研究連絡のための研究会：東京，大阪各2回（計4回）。
4. 自動化研修（CAIプログラム）開発班の研究活動：「自動化研修（CAIプログラム）開発とハイパーテキスト化研究」プロジェクトとその研究協力。

以上の課題をもって，本研究所の言語研修に関する諸問題を検討するとともに，日本語との対照研究を通じて対象言語の特徴を把握し，教材と方法などの改善に役立てる。検討課題は，研修のあり方，実施言語の選定と計画の検討，実施方法（カリキュラム，テキストの構成，指導・訓練の方法，効果の測定，評価の方法）などである。（所員22名，共同研究員8名） 23頁参照

自動化研修（CAIプログラム）開発とハイパーテキスト化研究 (大江孝男)

本年度に予定する事業および研究活動は次のとおり。

1. 自動化研修（CAIプログラム）開発班の研究会：東京2回（4年7月，10月）。
2. ハイパーテキスト化，およびエキスパート・システム編成に関する研究会。

上記において，検討すべき課題は次のとおり。

- ①自動化研修開発班は，第2期として申請する科学研究費補助金による研究計画（2年）を中核として，自動化研修の利用に関する研究（自動化可能な範囲，実施可能な事業，プログラムの開発，必要な施設，など）を実施する。
- ②ハイパーテキスト化，およびエキスパート・システムの現状と必要な機器，ソフト等の現況を調査し，実現すべき形態と活用する方法，組織等について検討する。特に，機器購入費，消耗品費，人件費等の費用をまかなうため，次年度以降，科学研究費補助金による研究班の編成を検討する。

（所員8名，共同研究員8名）

辞典編纂プロジェクト (梅田博之)

アジア・アフリカ諸言語の言語資料を蒐集，機械処理し，それに音韻論的，辞学的，形態論的，統辞論的分析を施し，これらの言語の辞典の編纂にそなえることを目的とする。（所員8名，共同研究員20名）

プロジェクト研究報告：辞典編纂1～4

ワールド・ミュージックの通文化的研究 (梶 茂樹)

現在、世界のさまざまな地域で、その地域に発したポップス（歌謡曲）が展開している。そして、それは今や国境を越え、世界化しようという勢いである。今まで、非欧米系の音楽を研究する学問分野として民族音楽学があったが、これは主として一定地域の伝統音楽を対象とするのみで、その地域の音楽をトータルに示してこなかったきらいがある。本研究では、現在アジア・アフリカ地域に行われるさまざまな歌謡曲を、伝統音楽とのつながりをふまえつつも、特にその都市性との関連でとらえ、その地域に住む人々と音楽との関係を社会学、人類学、言語学、音楽学などの専門家をまじえて学際的に考察する。（所員5名、共同研究員11名）

アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究 (奈良 毅)

本プロジェクトは、アジア・アフリカ諸地域における言語、文学、歴史、地理、政治、経済等に関する文献情報をデータベース化し、さらに本研究所がおこなっている海外学術調査と連動し、それによって得られた音声・映像・画像情報を利用し、これら文献・音声・映像・画像情報を統合することによって立体的な情報処理をおこない、より高度なハイパーテキストを構築することを目的とする。

本年度は、①南アジア地域に関連した諸言語（ベンガル語、ヒンディー語、パンジャーブ語、タミル語、カンナダ語、サンタル語、カスィ語、ルシャイ語、オリア語、カシミール語、マラーティー語、テルグ語、ムンダリー語、メיתי／マニプーリー語、アッサム語、グジャラート語、スィンディー語、ムンダリー語、ヌラヤーラム語、ナガ諸語、ウルドゥ語等）のデータベース化をおこない、その言語学的分析、および統合的な情報処理（ハイパーテキスト）の方法を研究するグループと、②西アジア地域に関する諸言語（アラビア語、ペルシア語、トルコ語、チャガタイ・トルコ語、オスマン・トルコ語、アゼリー・トルコ語、ウズベク語、ウイグル語、ヘブライ語、グルジア語、アルメニア語等）のデータベース化をおこない、その言語学的・歴史学的分析、および統合的な情報処理の方法を研究するグループとの2分科会を設けて実施する。両分科会は、常時情報交換をおこない、かつ共同研究会をもつことによって各分科会の研究成果を統合した広域的ハイパーテキストを構築することをめざす。（所員5名、共同研究員25名）

プロジェクト研究報告：Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project 1, 2, 3

原初の海の真中でシェー
シャ龍を寝床にヴィシユ
ヌは宇宙を夢見る。
夢見られた世界の中での
幸せを求めて人々は祈
る。（カトマンドゥ郊外
のブッダニーラカクタ寺
院、高島 淳）



広域言語文化第一部門

アジア人移民社会の研究——特にインド人（南アジア人）コミュニティーを中心に（内藤雅雄）

本研究は、中国人と並んで古くから、また広範な地域にわたって移民として出ていったインド人（パキスタン系、バングラデシュ系を含めて南アジア人と総称する）が、移民先でどのようなコミュニティーを形成したのか、それが全体社会のなかでどのように位置づけられてきたのかを、政治学、経済学、歴史学、人類学、言語学など学際的な観点から考察しようとするものである。

彼らは移民の時期や動機は異なるが、世界各地に広がっていった。そして時に先住の人々との間に齟齬や対立を生み出したり、また不可避にホスト社会の社会的、文化的影響にさらされながらも、言語、宗教、カーストなどさまざまな伝統的な価値や慣習の維持につとめ、独自のアイデンティティを創出してきた。本研究ではまず、インド人（南アジア人）の各地各国におけるこうした移民コミュニティー形成の歴史をつぶさに再構成していくことを目指す。

今日、多くの国々でインド人（南アジア人）コミュニティーの存在は、すでにその社会における不可欠の構成要素をなし、彼らの存在がその政治、経済、さらに社会、文化等さまざまな分野で無視し得ないインパクトを及ぼしていることも事実であり、この問題は移民研究の重要なテーマである。先進諸国においても、移民ないしマイノリティー・コミュニティーの人権や地位、アイデンティティのあり方が深刻な政治的、社会的問題として顕著化しているが、これを考える上でも、上述したようなインド人（南アジア人）コミュニティー形成の歴史およびホスト社会あるいは他のマイノリティー・コミュニティーとの関わりを広い視点から捉える作業は、極めて重要な手がかりを提供してくれるはずである。

（所員2名、共同研究員11名）

東アジアの社会変容と国際環境（中見立夫）

近年における18—20世紀東アジア史研究の特色は、従来にくらべて大幅に文書史料の利用が可能となったことである。これらの文書史料の状況を、体系的に把握して研究へ結びつけていくことがなによりの急務である。また関係諸国学界・研究者との交流も飛躍的に拡大するとともに、おたがいの研究の共通性と異質性も明らかになってきた。本プロジェクトでは、18世紀より20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題点を、文書史料によりどこまで明らかにできるか検討する。

毎年度トピックを決め、ゲストを含めた研究会を開くとともに、研究叢刊、資料叢刊も刊行する予定である。（所員7名、共同研究員26名）

言語文化接触に関する研究（中嶋幹起）

東アジアに共生する幾多の民族の言語は多様性に富み、その長い歴史と相まって、多くの言語資料が集積されている。さらに、近年は、中国やソ連などの開放政策により、学術成果も公にされつつある。本プロジェクトでは、満洲語、モンゴル

語、エウエンキ語、漢語、ウイグル語、チベット語、白語などの言語研究者が現地調査での成果を報告し、それぞれの研究について、言語学のみならず、文化人類学、歴史学などの分野を含めた多角的かつ広域的視点から討論をおこないつつ、言語のダイナミクスを探る。刊行は『言語文化接触に関する研究』（1～4）を続行する。（所員3名、共同研究員15名）

アジア遊牧民の歴史と言語（岡田英弘）

アジアの全体史像を構築するにあたって問題となる諸要素の一つは、内陸地域に広く散在する遊牧民の史的役割である。しかしその解明は史料の制約と用語・概念の未発達のために遅れた段階にある。この研究プロジェクトでは、満洲、モンゴル、トルコ、チベット、バルシア、アラビア等の地域の歴史と言語の専門家の協力のもとにできる限り一貫した叙述の可能性を探求することを目的とし、年2回の研究会を開催する。（所員3名、共同研究員18名）

南東アジアにおける「正統」の波及・形成と変容（石井 溥）

ユーラシア大陸南東部の多くの文化は、それぞれの基層文化の上にインドや中国の文明の影響を直接、間接に受けつつ形成されてきた。そのようななかで、各文化・社会が自らを「正統的」なものとして作り上げていく傾向は、かなり一般的に見られる現象と考えられる。このような「正統」観念はインド文明の及んだ地域では、人間・文化・社会のあるべき姿を指す「ダルマ」という言葉で表わされることが多い。

本プロジェクトでは、ヒマラヤ地域、スリランカ、東南アジアを主対象地域とし、大文明、特にインド文明との接触によって形成された諸文化のありかたを「ダルマ」の概念を念頭に置きつつ比較考察し、その類似性、多様性を究明し、さらに相違についてはその存在の理由を考える。分析対象としては政治組織、都市構造、宗教、宗教図像、社会構造、日常生活などの側面を取り上げ、基層文化にも十分な注意を払う。また、方法としては、従来の手法に加え、都市構造、宗教図像の研究などにハイパーテキストを利用し、統合的分析を目指す。

なお、ここでいう「南東アジア」とは、アジアのなかで、カシミールより東および南に位置する諸地域を指すこととする。（所員4名、共同研究員26名）



記録的なダーカー（バン
グラデシュ）の大洪水
（内藤雅雄）

東南アジア史像の変革 (池端雪浦)

本プロジェクトの目的は歴史学・考古学・歴史民族学・国際関係論の学際的研究によって、東南アジア史を総合し、新しい東南アジア史像を構成することにある。ここ数十年來、東南アジア史の研究は国の内外で飛躍的な展開をみせている。この背景には、1) 史(資)料の発掘・収集・利用面において、また現地調査の機会・規模・方法において、研究者をとりまく研究環境が大幅に改善されたこと、2) 関係諸科学に触発されて過去の経験的世界への関心が多様化するとともに、過去の経験的事実や事象を処理・解釈するための概念構成や参照枠組みが精緻化され洗練されてきたことなどがあげられよう。しかし、こうした研究状況に支えられて個別研究の面では長足の進展がみられた反面、それらを総合する仕事は著しく後れている。総合化は当面、二つのレベルで要請されている。一つは、過去の事実や事象を構成する内在的世界と外在的世界をどのように総合して把握するかという問題。もう一つは、個々の時代に多様な〈社会〉あるいは〈域圏〉の有機的連関として成立していた〈東南アジア世界〉が、時間軸にそって全体としてどのような変化の姿を織り成してきたのかという問題である。本プロジェクトではこれらの問題の考察と併せて、東南アジア史研究に関する史(資)料のデータベース作りをおこなう。(所員4名、共同研究員21名)

漢民族と周辺少数民族の文化接触と変容 (三尾裕子)

本プロジェクトは、漢民族及び周辺の少数民族コミュニティの社会構造や価値観などの分析を通し、これら諸民族文化の伝統的様態、また相互の接触による変容の様を考察する。少数民族の文化は、それぞれの基層文化を持ちながら、歴史的に常に中華文明と不即不離の関係にあり、その影響を受けてきた。しかしまた、漢民族も諸民族の融合体であり、漢民族が主に担ってきた中華文明も、諸少数民族文化の影響を色濃く受けており、地域差も大きい。本プロジェクトでは、中国大陸部だけでなく、台湾、香港、東南アジア華僑社会、東南アジア内陸部の諸民族社会も視野に入れつつ、これらの文化の共通性や多様性を究明する。(所員2名、共同研究員19名)



アムダーワード(インド・グジャラート州)のモハッラム(1988年8月)
市内のサーバルマティー川の河川敷にスラムをつくって住むムスリムたちも、モハッラムには服を着換え、大きなタワーを引いて町を練り歩く。(内藤雅雄)

広域言語文化第二部門

アフリカにおける都市化の比較研究 (日野舜也)

本研究は、現代アフリカにおいて進行するもっとも大きな社会変化である都市化と地域形成の問題について国民社会の形成、都市社会の構造、都市村落関係の展開、地域共通文化、リングァ・フランカ（地域共通語）の機能などとの関連について、長期のフィールドワークをとまなう、長期継続的な比較研究をおこない、その資料にもとづいて動態的に解明しようとするものである。

今年度は、平成2年度、平成3年度に発刊した第一巻第二巻につづいて *African Urban Studies*, Vol. III の刊行をおこなう。(所員8名、共同研究員25名)

イスラム圏における異文化接触のメカニズム (家島彦一)

イスラム世界の基本的な特質は、その地理的な広がり長期にわたる歴史展開の過程で、複雑に、かつ重層的にさまざまな文化的・社会的要素を含有し、対立・緊張と共存・調和の諸関係のなかで変容してきた多重・多層の国際的な流動社会であると捉えることができる。

本プロジェクトは、そうしたイスラム世界の社会・文化にみられる多様な接触のメカニズムを総合的に明らかにすることを目的としている。以上の目的にもとづいて、過去5年間にわたって、「市(suq/bazar)の比較研究」を具体的なテーマとして研究を進めてきた。そして本年度より新たに「イスラム圏における人間動態と情報に関する総合的研究」のテーマで共同研究を始める。イスラム世界はダイナミックな人間・もの・情報の移動・交流を特徴とする。プロジェクト研究会では、様々な移動の様態とともに活発な移動を支える要素としての「情報」のメカニズムについて、歴史学・言語学・人類学など、広域的・学際的に解明しようとするものである。なお本プロジェクトの研究を基礎として、2年後(平成5年)には海外調査を計画している。

本プロジェクトは、その研究対象においてアジア・アフリカの広域的地域にまたがる諸問題を含んでおり、研究部門「広域言語文化第二」に関連する共通の課題として研究を進める。(所員10名、共同研究員30名)



シナイ半島 砂漠の中の道路上の行商人 (西尾哲夫)

国際学術交流

外国人研究者の招聘

本研究所は、国際的な学術交流・共同研究を推進するために、外国からアジア・アフリカの言語文化の専門家を外国人研究者として受け入れ、研究の便宜を供与しています。比較言語文化論研究部門ならびに言語文化情報研究部門の情報開発分野は、外国人研究者を客員として受け入れるためのポストです。このほか日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する外国人研究者を、随時受け入れています。過去4年間に外国から受け入れた研究者は以下のとおりです。

1989

照那斯图	中華人民共和国	モンゴル語学
Raouf Abbas Hamid	エジプト	近代史
任 洪彬	大韓民国	韓国語学
胡 坦	中華人民共和国	シナ・チベット語学
王 鍾翰	中華人民共和国	清朝史
Frank M. Heidemann	西ドイツ	民族学、社会学

1990

張 興権	中華人民共和国	言語学
成 百仁	大韓民国	満洲語学
Mohammad-Reza Nasiri	イラン	イラン近現代史
Nai Pan Hla	ミャンマー	モン語学

1991

Jerry Norman	アメリカ合衆国	中国語学
Patrizia Violi	イタリア	記号学
Talat Tekin	トルコ	古代トルコ語学
Toomas Help	エストニア	エストニア語学
Nasrin F. Hakami	イラン	社会学
David P. B. Massamba	タンザニア	スワヒリ語学
Lawrence A. Reid	アメリカ合衆国	オセアニア語学・歴史学
Hans-Peter Vietze	ドイツ	モンゴル語学
Wufela Yaek'olingo	ザイール	口承文芸学
龔 煌城	台湾	西夏語学
Bando B. Rajapurohit	インド	言語学、音声学
Gregory O. Nwoye	ナイジェリア	言語学
Ungku Maimunah Mohd.		
Tahir	マレーシア	文学

1992

Pradyumna P. Karan	アメリカ合衆国	人文地理学
Ruth M. Beshu	タンザニア	言語学
林 美容	台湾	文化人類学
André Coupez	ベルギー	比較言語学、口承文芸学
Mücteba İlgürel	トルコ	歴史学

外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力を進めてきましたが、最近はさらにこれらの機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実をはかろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関名と締結年および共同で実施した事業等は、以下の通りです。

外国機関名 (略号)	締結年	国名
国立科学技術研究機構 (ONAREST) (現・高等教育・情報科学・科学研究省(MESIRES))	1978年	カメルーン
1969年から1976年の文部省科学研究費補助金による現地調査「アフリカ部族社会の比較調査」(研究代表者・富川盛道教授)におけるカメルーンとの共同研究にさいして、双方において、研究協力協定の必要性が認識され、1978年9月、カメルーン国立科学技術研究機構の人文科学研究所所長、Samuel Ndoumbe-Manga氏をまねき、本研究所において協定が締結された。		
協定締結後の共同研究、所員の現地における共同研究(1980—81, 82, 84, 86):カメルーン研究者の現地調査参加(1982, 84, 86, 87, 89, 90, 91):本研究所におけるカメルーン研究者の成果刊行、単行本8冊(<i>African Languages and Ethnography</i> シリーズ)、論文1点(Sudan Sahel Studies)。		
インド諸語中央研究所 (CIIL)	1987年	インド
CIIL 所長本研究所訪問(1983)、副所長来訪(1985)、所員来所共同研究(1984—85, 1991—92):本研究所所員 CIIL 訪問(1982, 87, 88, 89, 91, 92):共同研究プロジェクト「南アジア諸言語の研究とそのデータベースの作成」を実施、共同研究年次報告書発行(1990, 91, 92)。		
インド統計研究所 (ISI)	1987年	インド
ISI 特別客員研究員本研究所来所共同研究(1985—86)、経済研究部長来訪(1988):本研究所所員 ISI 訪問(1987, 88, 89, 90, 91):共同研究プロジェクト「電算機補助によるラビンドラナート・タゴールの言語の分析的研究」を実施中(1987—):電算資料シリーズ3冊発行(1987, 88, 90)。		
チベット言語文化研究所 (LCAT)	1988年	フランス
敦煌の古代チベット語文献のデータベース化をおこなっているが、その一部の KWIC 索引は、 <i>Choix de Documents Tibétains à la Bibliothèque Nationale III Corpus Syllabique</i> として、フランス国立図書館から1990年に出版された。		
人文科学研究所 (ISH)	1990年	マリ
文部省科学研究費補助金による現地調査「ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究」を継続的に実施し、その成果を ' <i>Boucle du Niger: Approches multidisciplinaires</i> Vol. 1. (1988), Vol. 2. (1990), Vol. 3. (1992) として刊行した。		

海外学術調査

本研究所は、その性格上、アジア・アフリカの現地調査をおこなうことを、重要な研究課題の一つにしています。過去5年間に、文部省科学研究費補助金（国際学術研究）で、本研究所員が組織した海外学術調査は以下のとおりです。

- 1) アラビア海・東地中海交流圏におけるイスラム基層文化の調査研究
1983年, 1984年 (三木 亘), 1986年 (上岡弘二)
- 2) バントゥ諸語の調査・分析と比較研究
1984年, 1985年, 1987年 (湯川恭敏)
- 3) ニジェール川大湾曲部諸文化の生態学的基盤および共生関係の文化人類学的研究
1986年, 1988年, 1990年, 1992年 (川田順造)
- 4) アフリカにおける都市化の総合比較調査
1986年, 1987年 (日野舜也)
- 5) 南アジア諸言語の調査研究とそのデータベースの作成
1987年, 1988年, 1989年 (奈良 毅)
- 6) アフリカにおける都市化の比較調査—とくに、地域形成・国民社会形成との係わりにおいて—
1989年, 1990年, 1991年 (日野舜也)
- 7) イスラム圏における市の比較研究—異文化接触のメカニズム—
1989年, 1990年 (上岡弘二), 1991年 (永田雄三)
- 8) バントゥ諸語と若干の隣接諸語の記述・比較研究
1989年 (湯川恭敏), 1990年 (加賀谷良平)
- 9) 中国周辺部における言語接触と社会文化変容—漢族文化と非漢族文化との相互関係—
1990年, 1991年, 1992年 (中嶋幹起)
- 10) 電算機補助による南アジア諸言語の研究
1991年, 1992年 (奈良 毅)
- 11) 多民族国家マレーシアにおける「共同体」の総合的研究
1991年, 1992年 (宮崎恒二)

なお、このほか各種財団の助成金による海外学術調査も組織されています。「海上ルートを通じての東西の文化的・経済的交流—インド洋周辺の港市遺跡の調査—」(研究代表者・家島彦一, 1984-85), 「フィリピン・フォークカトリシズムの歴史人類学的研究」(研究代表者・池端雪浦, 1984-87) などがその一部です。

「国際学術研究に関する調査研究」(通称「国際学術研究総括班」)の活動

このほかに文部省科学研究費補助金(国際学術研究)を受けている「総括班」は、本研究所所長を代表者とし、他の様々な機関に所属する研究者によって組織され、本研究所に事務局を置いて、科学研究費(国際学術研究)にかかわる研究者・研究組織相互間、および研究者側と文部省の間の情報交換、連絡調整などの活動を行っています。活動の主なものとしては、科研費(国際学術研究)で海外に派遣される研究組織の代表者を集めて情報交換を行う「研究連絡会」の開催や国際情勢に即応した研究調査を可能にするための「学術研究体制調査のための海外派遣」および『海外学術調査ニューズレター』(年3回)の出版があります。

助手等の現地投入

アジア・アフリカの言語文化の研究にとって、各地域で話されているさまざまな言語の修得が必須であることは言うまでもありません。本研究所では助手等の若い研究者をそれぞれ2年の期間、アジア・アフリカの諸国に派遣しています。この現地投入は、言語を自由に話し、あるいは読み、書く能力を獲得するだけでなく、長期間現地の生活にとけこむことによって、その地域の文化や歴史の研究に対する幅広い視点を身につけることを目的としています。この計画は1967年から実施され、現在までに合計26名が派遣されました。

- 1967年—1969年 石垣幸雄 (エチオピア), 守野庸雄 (タンザニア)
1969年—1971年 松下周二 (ナイジェリア), 家島彦一 (アラブ連合)
1971年—1973年 内藤雅雄 (インド), 中野暁雄 (モロッコ, 南イエメン)
1973年—1975年 福井勝義 (ソマリア), 中嶋幹起 (香港)
1975年—1977年 加賀谷良平 (ボツワナ), 湯川恭敏 (タンザニア, ザイール)
1977年—1979年 石井 溥 (ネパール), 藪 司郎 (ビルマ)
1979年—1981年 羽田亨一 (イラン, トルコ), 清水宏祐 (アラブ連合, イラン, トルコ)
1981年—1983年 山本勇次 (ネパール), 新谷忠彦 (ニューカレドニア)
1983年—1985年 辻 伸久 (中国, 香港), 水島 司 (インド)
1985年—1987年 中見立夫 (中国, モンゴル), 梶 茂樹 (ザイール, ケニア, ザンビア)
1987年—1989年 松村一登 (フィンランド, ソ連), 宮崎恒二 (オランダ, インドネシア)
1989年—1991年 林 徹 (中国, トルコ), 栗本英世 (エチオピア, ケニア)
1991年—1993年 栗原浩英 (ベトナム, ソ連), 峰岸真琴 (インド)



トルコの大都市のいわゆるゲジェコンドゥ「夜の家 (一夜の間に不法に建てられた家)」と呼ばれる地域では、各家庭まで水道が引かれていないことが多い。公共の水汲み場(セビル)で水を汲んで家まで運ぶ。水汲み場は、女性の井戸端会議の場でもある。ちなみに、「夜の家」のほうが、兎小屋のわが寓居よりも、しばしばずっと立派である。(トルコ: アンカラ, アルトゥンダー) (上岡弘二)

共同研究員（公募）

1978年度より、共同研究プロジェクトとは別に、本研究所において一定期間（2週間以上2ヶ月以内）研究をおこなう共同研究員を公募しています。

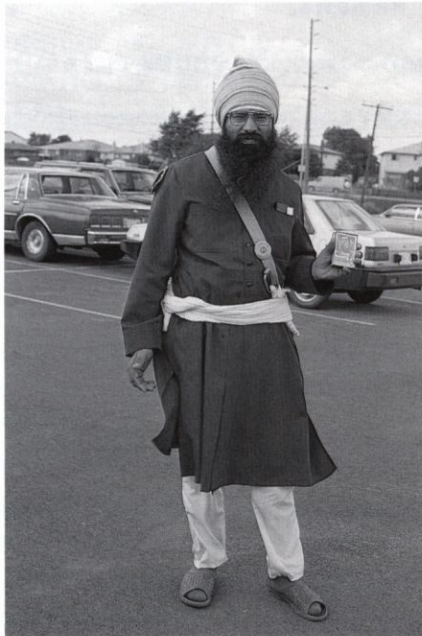
大学院地域文化研究科博士後期課程

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科（博士課程）を平成4年度より設置しました。本研究所では大学における教育体制のこうした発展に全面的に協力するべく、本研究所に大学院委員会を設置し、15名（平成4年度）の教官が参加し、言語学、民族学・文化人類学、歴史学などの分野における学生（4名程度）を受け入れ、教育活動に従事することとなりました。

研 究 生

大学卒業かそれと同等以上の学力がある者が研究所で研究に従事することを希望するときは、研究生として入所を許可します。

研究生は入所料及び研究料を納付し、指定の教官の指導を受けます。



トロント市のシク教徒
インド人移民の中で多数を占めるシク教徒の中には、シク教徒の国家「カーリスターン」創設を求める動きがある。トロントのシク教徒集会場で写真の人物はその必要性を熱っぽく語っていた。
(内藤雅雄)

言語研修



エストニア語



ビルマ語

本研究所では、アジア・アフリカ地域の言語の修得のために、本研究所員を中心にその言語を母語とする人、および日本人研究者を講師として、毎年夏、言語研修を開講しています。開講する言語の数は、東京会場が2言語、関西会場が1言語、研修時間は150時間です。最近、言語研修を実施した言語は、次の通りです。(1992年実施決定も含む)

11頁参照

研修言語名(修了者数)

年度	東京会場	関西会場
1981	ヒンディー語(8), パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1982	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1983	チベット語(12), フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1984	ピリピノ語(タガログ語)(12), ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1985	朝鮮語(14), カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1986	西南官話(5), タミル語(12)	ベンガル語(8)
1987	中原官話(10), タイ語(19)	シンハラ語(8)
1988	ペルシア語(10), トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1989	ベンガル語(20), ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1990	朝鮮語(11), インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1991	エストニア語(12), ビルマ語(15)	中国語(13)
1992	ネパール語, アラビア語エジプト方言	フィリピン語

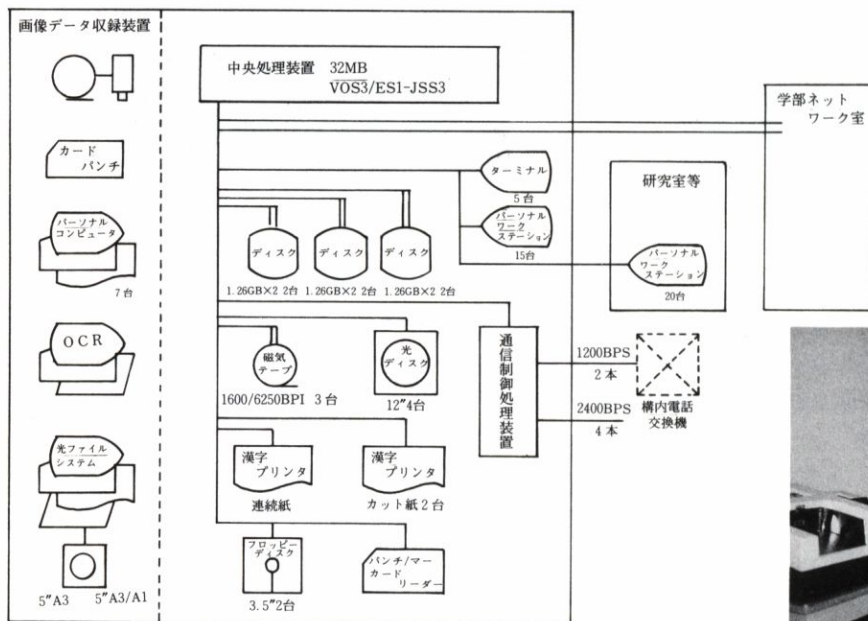
研修生(各言語約10名)は、大学など研究機関を通じて全国から公募します。受講を認められた者は入所料, 受講料を納付することになります。また, 課程を修了した人には審査のうえ修了書が授与されます。

上記の研修事業と関連して, より効果的で充実した研修方法を開発するための研究の一環として, 科学研究費補助金による支援を受けつつ, 言語研修において自動学習機器に合わせて機械化する部分をプログラム(CAI)化するための研究を実施しています。この研究によって開発した「CAIプログラム」は, 研修コースのなかで補助教材として活用することが期待されるばかりでなく, 必要に応じて希望する言語の学習をすすんで個人的に受講できるよう設営し, 増大し, 多様化する社会的要請に 대응できるようにすることを目指すものです。

施設

電 算 機 室

システム構成図



本研究所では、1978年1月から HITAC M-150システムを導入し、HITAC M-240D を経て現在 HITAC M-640/20システムが稼動しています。主記憶32MB、ディスク総容量15GB、12インチ光ディスク4ドライブ、磁気テープ3デッキ、3.5"フロッピーディスク2ドライブがあります。入力にはパンチ/マークカードリーダーがあります。出力のためには連続紙漢字プリンタの他にカット紙漢字プリンタが2台あります。これを使用して、大きさも形も様々なAA諸言語の文字を印刷できるようなソフトウェアが開発されていて、国内外の研究者に利用されています。ワークステーションは、電算機室には15台ですが、研究室等にも設置されています。2,400BPSの通信回線には4台のパーソナルコンピュータが接続されています。また、1,200BPSの構内電話回線が2本あります。

ソフトウェアとしては、単語の用例検索システムが準備されています。これはAA諸言語をローマ字や数字におきかえることをせず、原字のままを入力し、データベース化するもので、必要に応じて何時でも任意の単語(列)の用例を検索し、それぞれの固有の文字で印刷することができます。このシステムは、文法研究や辞典編纂の資料作成ばかりでなく、史料や調査記録の索引を作ることもでき、言語学に限らず、歴史学や文化人類学の研究にも活用できます。

オフラインの装置には、パーソナルコンピュータの他に、画像データ収録システムがあり、アジア・アフリカの固有の文字フォント作製に利用されています。また、1987年度から導入した光ディスクファイルシステムが2台あり、印刷された大量の資料を登録して、随時必要なページを参照できるようになっています。さらに、1988年度にOCRを導入し、ローマ字系テキストについては、短期間に大量のデータ入力をおこなうことができます。

図 書 室

日本における唯一の人文科学系全国共同利用研究所である本研究所は、アジア・アフリカ諸地域の言語文化に関する研究に必要な基礎資料を昭和39年の創設以来収集してきました。

対象地域の広域化、研究テーマの複合化、方法論の多様化など、これらの地域に関する研究の諸条件は近年大いに変化していますが、こうした状況に留意し、かつ内外の諸研究機関から参加する共同研究員や研究生および一般の研究者の需要にも応えるため、幅広い文献・資料の収集に努めています。海外研究機関（56ヵ国220機関）との図書交換を通じて研究書・論文集等も収集し、平成3年3月末現在、蔵書総数は約71,709冊、マイクロフィルム6,261リールです。

蔵書のなかには、アジア・アフリカ諸地域の国語教育資料をはじめ、世界各国語の聖書などが含まれていますが、洋雑誌の整備には特に力をいれ、機会あるごとにバックナンバーを購入する努力を続けています。たとえば、19世紀末から1970年までのイランの主要新聞65種がマイクロ化されているほか、19世紀創刊のベンガル語文芸雑誌5種類のバックナンバーがそろっているなど、他の研究機関に見られない資料が所蔵されています。

また本研究所の特色あるコレクションとして、次のような文庫があります。

① **山本文庫**（昭和42年受入）

著名な満洲語学者、故山本謙吾氏（1920～65）の個人蔵書で、満洲語・ツングース語関係の諸文献を中心に言語学・音声学・アルタイ語学等に関する諸文献（和・洋書計598冊）を含む。

② **浅井文庫**（昭和45年受入）

著名なオーストロアジア言語学者、故浅井恵倫氏（1895～1969）の蔵書。アジア・アフリカ諸言語の研究書・辞典類（和・洋書計191冊、文書18葉）をはじめ、高砂族関係の貴重な言語資料を含む。

③ **小林文庫**（昭和51年受入）

著名なモンゴル史研究者である故小林高四郎氏（1905～87）の個人蔵書で、モンゴル民族の生活と習俗に関する文献（和・洋書計1,671冊）を含む。

④ **前嶋文庫**（昭和61年受入）

わが国におけるイスラム研究の創立者の一人である故前嶋信次氏（1903～83）の個人蔵書のうち、和漢書1,272冊を受け入れたもの。イスラム関係のみならず、東洋史、東西交渉史、旅行記などを含む。

このほか本研究所国語教育資料調査専門委員会が収集したアジア・アフリカ諸国の教科書約300冊も所蔵されています。また、外国人研究者のための日本研究資料（約1,220冊）の収集も積極的におこなわれており、海外および在日の外国人研究者の便宜に供する態勢も整えられつつあります。

平成3年度 一般設備費等購入資料

1. 米国国務省文書：ロシア・ソ連の国内事情：1906-1944。
（マイクロフィルム、293リール）
2. インドネシア・オセアニアの文化社会事情に関する基礎資料：1811.-
（オランダ、ドイツ、フランス、イギリス等出版図書143冊）
3. マレーシア地方行政文書：（マイクロフィルム、691リール）
4. オスマン語 劇場ポスター：（オスマントルコ、168枚）

音 声 学 実 験 室

「ヨルバ語のトーンなのですが、基本周波数の動きは？」

「広東語の声調の上がり下がりを目で見て確かめたいんですが……」

「フラニ語ってどんなことばですか？実際に録音したのがありますか？」

「言語研修に使う教材を、良い条件で録音したいんだけど……」

こんな例は、音声学実験室の活動のほんの一部にすぎません。サウンド・スペクトログラフやピッチ・インディケーターをはじめとした音声分析用機器が、フィールド調査で収集された音声資料の処理にあたっています。

音の性質・特徴やその調音状態を観察し記録するために、次のような分析機器が用意されています。サウンド・スペクトログラフは、音波を周波数分析して、その各時点ごとの音波の構成要素をとりだして特殊用紙上に濃淡模様で表示してくれます。周波数分析には用途に応じてワイドバンドとナローバンドがあります。ワイドバンドでの濃淡模様は各音の長さと共にそれぞれのさまざまな音色を示してくれ、ナローバンドでは各音の長さと共に音の高低変化を示してくれます。このような分析を通じて未知の表現しがたい音声を選んだ規準のもとで表現可能にしたり、またその調音状態を推測する手助けを与えてくれます。ピッチ・エクストラクターは、音の経過時間にしたがって各時点での基本周波数や音の強弱の度合を分析し、ブラウン管面上に表示してくれます。またその管面の表示を特殊紙上にコピーすることもできます。管面の表示時間は自在ですので、単語の分析のみならず文のイントネーションの分析もできます。フォトコーダーは、音声データの極めて詳細な観察のため、音声波を直接表示・記録することにも用いられています。エレクトロ・パラトグラフは、舌の調音運動を直接に観察し記録するための機器のひとつです。32個の微小な電極を埋めこんだ人工口蓋を発話者の口蓋にはめて、電極と舌との各時点ごとに変化する接触状態を、機械の前面パネルに口蓋状に配列した32個の小ランプの点滅により表示してくれます。また、この点滅表示を特殊用紙に記録することもできます。

さらに、アジア・アフリカ地域のマルチメディア・データベースの作成も予定されています。これはアジア・アフリカ地域の言語文化情報を、映像情報・音声情報・文字情報を統合して提供するデータベースです。例えば、「スワヒリ語での挨拶は？」と尋ねると、音声と文字による挨拶語の説明はもちろん、挨拶時の情感・表情・仕草などの感覚的情報も、映像で同時に提供されます。

このほかに、カセットテープを高速にコピーするテープ・デュプリケーターが、言語研修用テープの作製やフィールド調査などで収集されたテープのコピーのために用意されています。また良好な条件でオリジナルテープを録音するために、防音室や各種のテープレコーダーやマイクロフォンが用意されています。

付属施設の“音声・言語研修資料室”には、フィールド調査で集められた世界のめずらしい言語や貴重な民話・民族音楽などのテープをはじめ、言語研修テキストのテープ、各種語学のレコードやテープが整理保管され、研究者の利用の便をはかっています。

出版物一覽

下記の出版物は非売品ですが、著者あるいは編集出版委員会の承認により、研究機関、個人研究者に寄贈することができます。なお、*印のものは在庫がありません。

- アジア・アフリカ言語文化研究 *Journal of Asian and African Studies*, Nos. *1(1968), *2(1969), *3(1970), *4(1971), *5(1972), *6(1973), *7(1974), *8(1974), *9(1974), *10(1975), *11(1976), *12(1976), *13(1977), 14(1977), 15(1978), 16(1978), 17(1979), 18(1979), 19(1980), *20(1980), *21(1981), *22(1981), *23(1982), 24(1982), *25(1983), *26(1983), *27(1984), 28(1984), 29(1985), *30(1985), 31(1986), 32(1986), 33(1987), 34(1987), 35(1988), 36(1988), 37(1989), 38(1989), 39(1990), 40(1990), 41(1991), 42(1992), 43(1992).
- アジア・アフリカ言語文化研究所 通信, Nos.1~74(1966~92).

アジア・アフリカ言語文化叢書

1. ピア・アヌマーン・ラーチャトン著・河部利夫訳註, タイ農民の生活, 1967.
- *2. 家島彦一訳註, イブン・ファドラーンのヴォルガ・ブルガール旅行記, 1969.
3. MATSUSHITA, S., *An Outline of Gwandara Phonemics and Gwandara-English Vocabulary*, 1972.
4. NAKANO, A., *Conversational Texts in Eastern Neo-Aramaic (Gzira Dialect)*, 1973.
- *5. TSUCHIDA, S., *Reconstruction of Proto-Tsouic Phonology*, 1976.
- *6. NAGATA, Y., *Mühsin-Zâde Mehmed Paşa ve Âyânlık Müessesesi*, 1976.
- *7. YAJIMA, H., *A Chronicle of the Rasûlid Dynasty of Yemen*, 1976.
8. MCFARLAND, Curtis D., *A Provisional Classification of Tagalog Verbs*, 1976.
9. MCFARLAND, Curtis D., *Northern Philippine Linguistic Geography*, 1977.
10. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol. 1, 1978.
11. HASHIMOTO, M. J., *Phonology of Ancient Chinese*, Vol.2, 1979.
12. KAWADA, J., *Genèse et évolution du système politique des Mosi méridionaux (Haute Volta)*, 1979.
13. BAUTISTA, Maria L., *Patterns of Speaking in Pilipino Radio Dramas: A Sociolinguistic Analysis*, 1979.
14. 石井 溥, ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容——, 1980.
15. MCFARLAND, Curtis D., *A Linguistic Atlas of the Philippines*, 1980.
16. YADAV, Kripal C., *Elections in Panjab: 1920-1947*, 1981.
17. El-Araby, S. A., *Teaching Foreign Languages to Arab Learners—Methods and Media—*, 1983.
18. KAWADA, J., *Textes historiques oraux des Mosi méridionaux (Burkina-Faso)*, 1985.
- *19. MIZUSHIMA, T., *Nattar and the Socio-Economic Change in South India in the 18th-19th Centuries*, 1986.
20. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 上冊, 1987.
21. TUNCOKU, A. M., *Japonya'nin Çin Halk Cumhuriyeti'ne Karşı Politikası (1952-1978)*, 1987.
22. BALLARD, W. L., *The History and Development of Tonal Systems and Tone Alternations in South China*, 1988.
- *23. ENRIQUEZ, V. U., *Indigenous Psychology and National Consciousness*, 1989.
24. 中嶋幹起, 湘方言調査報告 下冊, 1990.
25. HARA, T., *Paribar and Kinship in a Moslem Rural Village in East Pakistan*, 1991.
26. NASIRI, Mohammad Reza: *Nâsireddîn Şah Zamanında Osmanlı-İran Münasebetleri (1848-1896)*, 1991.

アジア・アフリカ基礎語彙集

- | | |
|--|--|
| 1. 山本謙吾, 満洲語口語基礎語彙集, 1969. | 10. 中嶋幹起, 福建漢語方言基礎語彙集, 1979. |
| *2. 梅田博之, 現代朝鮮語基礎語彙集, 1971. | 11. 橋本萬太郎, ベエ語語彙集, 1980. |
| *3. 橋本萬太郎, 客家語基礎語彙集, 1972. | 12. 新谷忠彦, ラデ語—ベトナム語—日本語語彙, 1981. |
| 4. 和田正平, イラク語基礎語彙集, 1973. | 13. 藪 司郎, アツイ語基礎語彙集, 1982. |
| 5. 石垣幸雄, エチオピア比較語句集, 1974. | 14. 中嶋幹起, 浙南吳語基礎語彙集, 1983. |
| 6. 守野庸雄, スワヒリ語基礎語彙用例集, 1975. | 15. 湯川恭敏, サンバー語語彙集, 1984. |
| 7. 坂本恭章, モン語語彙集, 1976. | 16. 梶 茂樹, <i>Lexique Tembo I</i> , 1986. |
| 8. 中嶋幹起, 閩語東山島方言基礎語彙集, 1977. | 17. 辻 伸久, 湖南省南部中国語方言語彙集, 1987. |
| 9. 奈良 毅, <i>Avahattha and Comparative Vocabulary of New Indo-Aryan Languages</i> , 1979. | 18. 橋本萬太郎, 納西語料, 1988. |

19. 中嶋幹起, 山東方言基礎語彙集, 1989.
 20. 新谷忠彦, 揚 昭, 海南島門語, 1990.
 21. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 A~C, 1990.
 22. 松下周二, ハウサ語ソコト方言, 1991.
 23. 守野庸雄, 中島 久, スワヒリ語辞典 D~J, 1991.
 24. 梶 茂樹, フンデ語語彙集, 1992.

言語研修テキスト

- *1. チベット語, 北村 甫ほか編, 全5冊(1974).
 *2. 朝鮮語, 梅田博之ほか編, 全3冊(1974).
 *3. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全5冊(1975).
 *4. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1975).
 *5. ビルマ語, 大野 徹ほか編, 全5冊(1976).
 *6. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全3冊(1976).
 *7. スワヒリ語, 守野庸雄ほか編, 全2冊(1976).
 *8. 広東語, 中嶋幹起ほか編, 全4冊(1977).
 *9. マラーティー語, 内藤雅雄ほか編, 全3冊(1977).
 *10. モンゴル語, 荒井伸一ほか編, 全4冊(1977).
 *11. トルコ語, 永田雄三ほか編, 全3冊(1978).
 *12. タイ語, 坂本恭章ほか編, 全2冊(1978).
 *13. ペルシア語, 勝藤 猛ほか編, 全3冊(1978).
 14. ハウサ語, 松下周二ほか編, 全3冊(1979).
 *15. ビルマ語, 藪 司郎編, 全3冊(1979).
 *16. ネパール語, 石井 溥ほか編, 全3冊(1980).
 *17. モンゴル語, 小沢重男ほか編, 全2冊(1980).
 *18. ベトナム語, 川本邦衛ほか編, 全4冊(1980).
 *19. 中国語, 大河内康憲編, 1冊(1981).
 *20. ヒンディー語, 田中敏雄ほか編, 全3冊(1981).
 *21. パシュトー語, 縄田鉄男編, 全3冊(1981).
 *22. アラビア語, 中野暁雄, サラーフ・アル・アラビ編, 全2冊(1982).
 *23. ハンガリー語, 岩崎悦子ほか編, 全2冊(1982).
 *24. チベット語, 北村 甫ほか編, 全3冊(1983).
 *25. フィンランド語, 松村一登ほか編, 全3冊(1983).
 26. パンジャーブ語, 溝上富夫編, 全3冊(1983).
 *27. ピリピノ語, 池端雪浦, リリア・アントニオ編, 全2冊(1984).
 28. ヨルバ語, 清水紀佳ほか編, 全2冊(1984).
 *29. トルコ語, 勝田 茂編, 全3冊(1984).
 *30. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1985).
 31. カンボジア語, 坂本恭章ほか編, 全4冊(1985).
 32. スワヒリ語, 宮本正典ほか編, 全5冊(1985).
 33. 西南官話, 橋本萬太郎, 馬真ほか編, 全2冊(1986).
 34. タミル語, 山下博司ほか編, 全2冊(1986).
 35. ベンガル語, 溝上富夫ほか編, 全3冊(1986).
 36. 中原官話, 中嶋幹起, 賀巍ほか編, 1冊(1987).
 37. タイ語, 森 幹男ほか編, 全4冊(1987).
 38. シンハラ語, 中村尚司ほか編, 全3冊(1987).
 39. インドネシア語, 森村 蕃ほか編, 全3冊(1988).
 40. ペルシア語, 上岡弘二ほか編, 全4冊(1988).
 *41. トルコ語, 林 徹ほか編, 全4冊(1988).
 42. ベンガル語, 奈良 毅編, 1冊(1989).
 43. ベトナム語, 栗原浩英ほか編, 全2冊(1989).
 44. アラビア語(エジプト方言), 藤井章吾ほか編, 全2冊(1989).
 45. 朝鮮語, 大江孝男編, 全3冊(1990).
 46. インドネシア語, 宮崎恒二ほか編, 全3冊(1990).
 *47. ペルシア語, 岡崎正孝, ハーシム・ラジャブザーデ編, 全4冊(1990).
 48. エストニア語, 村松一登編, 全2冊(1991).
 49. ビルマ語, 根本敬ほか編, 全3冊(1991).
 50. 中国語, 杉村博文, 古川裕編, 全4冊(1991).
 資料1. スワヒリ語〈三日坊主コース〉テキスト, 守野庸雄編, 1冊(1985).

特定研究「言語」出版物

「文字と言語」研究資料

- *1. HASHIMOTO, M. J., *hP'ags-pa Chinese*, 1978.
 2. 橋本萬太郎編, 東干語文字の音表化(資料集), 1978.
 *3. 橋本萬太郎編, ラテン化新文字(資料集), 1978.
 4. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(I), 1979.
 5. SCHAANK, Simon H., *The Lu-Feng Dialect of Hakka*, 1979.
 6. 吉田 忠, 蘭学における訳語の考察, 1980.
 7. 川本邦衛, 現代ベトナム語 漢語・「漢字語」語彙集(II), 1980.

「AA 諸言語と日本語の学習」資料

- *77-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語——朝鮮語1. 1978.
 *77-2. 大河内康憲: 基本動詞対照用例集 日本語——中国語1. 1978.
 *77-3. 坂本 恭章: 基本動詞対照用例集 日本語——タイ語1. 1978.
 *78-1. 梅田 博之: 基本動詞対照用例集 日本語——朝鮮語2. 1979.

- *78—2. 大河内康憲：基本動詞対照用例集 日本語——中国語 2. 1979.
- *78—5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語——ヒンダイ語 1. 1979.
- *78—6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語——アラビア語 1. 1979.
- *78—7. 守野 庸雄：基本動詞対照用例集 日本語——スワヒリ語 1. 1979.
- 78—8. 梅田博之ほか：助詞対照用例集 1：「の」日本語——AA 諸言語, 1979.
- *79—1ab. 梅田博之ほか：日本語の発音(朝鮮語を母語とする学習者のための日本語発音教材試案), 1980.
- *79—3. 坂本 恭章：基本動詞対照用例集 日本語——タイ語 2. 1980.
- *79—5. 奈良 毅：基本動詞対照用例集 日本語——ヒンディー語 2. 1979.
- 79—6. 内記 良一：基本動詞対照用例集 日本語——アラビア語 2. 1980.
- *79—7. 守野 庸雄：基本動詞対照用例集 日本語——スワヒリ語 2. 1980.
- 79—8. 梅田博之ほか：AA 諸言語教育基本語彙表, 1980.

共同研究報告

1. アジア・アフリカ諸国における国語教育資料の調査研究——中間報告, 1966.
アジア・アフリカ諸国国語教育資料目録, 1967.
2. アジア・アフリカ言語調査票, 上(1966), 下(1967).
3. 「イスラム化」に関する共同研究報告, Nos.*1(1968), *2(1969), *3(1970), 4(1971), 5(1972), *6(1973), 7(1982), 8・9(1986).
4. 現代インド・パキスタン文学共同研究報告, Nos.1(1970), 2(1971), 3(1972).
- *5. アジア・アフリカにおける宗教運動共同研究報告, Nos.*1(1972), *2(1972), *3(1973).
6. アジア・アフリカ文法研究, Nos.*1(1972), 2(1973), 3(1974), 4(1975), 5(1976), 6(1977), 7(1978), 8(1979), 9(1980), 10(1981), 11(1982), 12(1983), 13(1984), 14(1985), 15(1986), 16(1987), 17(1988), 18(1989), 19(1990), 20(1991).
7. *Asian and African Grammatical Manual*(アジア・アフリカ文法便覧), 1972～：

<ul style="list-style-type: none"> No. *11. Korean(梅田博之), 1973. 11z. Sakhalin Ainu(村崎恭子), 1978. *12b. Fukienese(中嶋幹起), 1976. *12z. Tibetan(北村 甫), 1977. 13. Indo-Aryan(石垣幸雄), 1980. 13a. Hindi(溝上富夫), 1980. *13b. Marathi(内藤雅雄), 1976. 13c. Bengali(奈良 毅), 1979. 13d. Khaling(鳥羽季義), 1979, 1984. 13e. Panjabi(溝上富夫), 1981. *13x. Tamil(徳永宗雄), 1981. 13y. Malayalam(伊藤正二), 1978. *14a. Cambodian(坂本恭章), 1974. *14b. Burmese(藪 司郎), 1974. 14c. Thai(森 幹男), 1975, 1984. *15b. Philippine(山田幸宏, 土田滋), 1975, 1983. *16b. Samoan(小田真弘), 1977. 	<ul style="list-style-type: none"> *17. Persian(上岡弘二), 1976. 17b. Baluchi(縄田鉄男), 1981. 17m. Mazandarani(縄田鉄男), 1984. 17p. Parachi(縄田鉄男), 1983. *17s. Shughni(縄田鉄男), 1980. *20. African(石垣幸雄), 1975. *21. Swahili(守野庸雄), 1976. *22a. Cushitic(石垣幸雄), 1972. 22b. Ethiopic(石垣幸雄), 1978. *23. Hausa(松下周二), 1974. *26. Fulfulde(江口一久), 1974. 33. Romance & Greek(石垣幸雄), 1973. 33y. Basque(石垣幸雄), 1979. 33z. Maltese(石垣幸雄), 1977. 34a. Albanian(石垣幸雄), 1979. *36. Uralic etc.(石垣幸雄), 1976. 40. USSR Major(石垣幸雄), 1980.
--	---
8. アフリカ部族社会の比較研究, 1. アフリカ部族社会の特質をめぐって(1971), *2. アフリカ社会の地域性(1973).
- *9. トルコ民族とイスラムに関する共同研究報告, 1(1974).
10. アジア・アフリカ語の計数研究, *1(1975), *2(1975), *3(1976), *4(鄒 嘉彦, 老乞大諺解単字索引, 1976), *5(坂本恭章, カンボジア語小辞典, 1976), *6(1976), *7(1977), *8(1978), *9(1978), *10(1979), *11(1979), *12(YUE, Anne O., *The Teng-xian Dialect of Chinese*, 1979), *13(1980), *14(藍清漢, 中国語宜蘭方言語彙集, 1980), *15(SHERARD, Michael, *A Synchronic Phonology of Modern Colloquial Shanghai*, 1980), *16(1981), *17(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈上冊〉, 1981), *18(徐琳・木玉璋, 僂僂族《創世紀》研究, 1981), *19(1982), *20(SHERARD, Michael, *A Lexical Survey of the Shanghai Dialect*, 1982), *21(1983), *22(1984), *23(傅懋勳, 納西族图画文字《白蝙蝠取經記》研究〈下冊〉, 1984), *24(1985), *25(ポール K.ベネディクト, 突破口：東南アジアの言語から日本語へ—日の神の民の起源, 1985), *26(1986), *27(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究, 1986), *28(1987), *29(徐琳, 白族《黄氏女対経》研究〈続〉, 1988), *30(1988).

- *11. *Oceanic Studies*, No.1(1976).
- *12. インド・パキスタン分離独立の史的研究 資料集*1(1976), *2(1977).
13. 南アジアの大河流域における農村社会の研究：南アジア農村社会の研究, 1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1979), 5(1980), 6(1985), 7(1987), 8(1987).
14. ヒマラヤ・チベットの生態・言語・文化に関する総合研究：YAK, *1(1977), 2(1978), 3(1979), 4(1980), 5(1981), 6(1982), 7(1983), 8(1987).
15. アフリカ社会の形成と展開—地域・都市・言語(1980).
16. 日本の言語文化研究リプリント・シリーズ, No.1(飯島 茂, 日本からみた“Thailand: A Loosely Structured Social System,” 1981), No.2(岡田英弘, 中国のなかの日本, 1982).
17. *Phraseological Questionnaire*, 石垣 幸雄 Vol.1, Nos.1～2, (*Aquatic Idiomatics*, 1982), Vol.3, No.1 (*Proverbial*, 1981).
18. *Performance in Culture*, No.1 (BEEMAN, William O., *Culture, Performance and Communication in Iran*, 1982), *No.2(AWASTHI, Suresh, *Drama: The Gift of Gods—Culture, Performance and Communication in India*, 1983), *No.3(NAGASHIMA, Y. S., *Rastafarian Music in Contemporary Jamaica—A Study of Socioreligious Music of the Rastafarian Movement in Jamaica*, 1984), No.4(AND Metin, *Culture, Performance, and Communication in Turkey*, 1987), No.5(OCHIAI, KAZUYASU, *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*, 1989), No.6(RAZ, Jacob, *Aspects of Otherness in Japanese Culture*, 1992).
19. *Nationalism in Asia and Its International Relations*. No.1(*Transformation and Peasant Movements in Contemporary Asia*, 1985), No.2(アジア政治の展開と国際関係, 1986).
20. 象徴と世界観研究叢書, No.1(高知尾 仁, 球体遊戯, 1986), No.2(橋本裕之, 春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー, 1986).
21. 南アジアにおける社会集団形成過程に関する比較研究, 1(柳沢 悠, 水島 司, 20世紀初め南インドにおけるカーストと土地保有構造の変動, 1988), 2(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, 1988), 3(KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Vijayanagar Rule in Tamil Country as revealed through a Statistical Study of Revenue Terms in Inscriptions*, Part two (Appendix III), 1989). 4(内藤雅雄編, 近現代南アジアにおける社会集団と社会変動, 1990).
22. 第三世界の大众文化の研究, 1(原 忠彦, インド・マンガの世界観序論, 1988).
23. 多民族国家における異化・同化形態の比較研究：マレーシア社会論集, 1(1988), 2(1989).
24. A Comparative Study on the Modes of Inter-Action in Multi-Ethnic Societies: Monograph Series, 1 (FUJIMOTO, Helen, *The South Indian Muslim Community and the Evolution of the Jawi Peranakan in Penang up to 1948*, 1988).
25. AA 研東南アジア研究, 1(世紀転換期における日本・フィリピン関係, 1989), 2(東南アジアのナショナルリズムにおける都市と農村, 1991).
26. イスラム圏における異文化接触のメカニズム——市の比較研究——, 1(1989), 2(1991).
27. 辞典編纂, 1(1989), 2(1990), 3(1991), 4(町田和彦, ヒンディー語逆引辞典, 1992).
28. 言語文化接触に関する研究, 1(1989), 2(侯 精一, 晋語平遙方言分類語匯, 1990), 3(杜拉爾・敖斯爾・朝克, エウンキ語基礎語彙集, 1991). 4(石明远, 山東省莒县方言, 1992).
29. *Annual Report on CIIL-ILCAA Joint Research Project*, 1(1990), 2(1991), 3(1992).
30. 18～20世紀南インド在地社会の研究(水島 司, 1991)(多民族国家における異化・同化形態の比較研究)
31. “A Reference Grammar of Mundari”(長田俊樹, 1992)(アジア・アフリカ言語文化資料の情報処理に関する基礎的研究)
32. South Asians Abroad Series, 1 (ed, KOGA Masanori, *South Asian Community Organizations in East Africa, The United Kingdom, Canada & India* 1992)

外国人研究者出版物

1. CONSTANTINO, E., *Isinay Texts and Translations*, 1982.
2. EL-ARABY, S. A., *Intermediate Egyptian Arabic—An Integrative Approach*, 1983.
3. 札奇斯欽, 我所知道的德王和當時的内蒙古(一), 1985.
4. 馬真ほか, 西南官話基本文型の記述, 1986.
5. DOWNS, J. F., *Tibetan Pilgrimage*, 1987.
6. 賀 巍, 汉语方言文稿集, 1987.

7. 李 榮, 渡江書十五音, 1987.
8. 侯 精一, 晋語研究, 1989.
9. 照那斯图, 八思巴字和蒙古語文献 I 研究文集, 1990.
10. 照那斯图, 八思巴字和蒙古語文献 II 文献汇集, 1991.
11. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of the Mon Version Dharmaśāstra*, 1991.
12. REID, L. A., *Guinaang Bontok Texts*, 1992.
13. VIETZE, H.-P. *Altan Tobči – Text und Index –*, 1992.
14. Pan Hla, Nai, *The Significant Role of Mon Language and Culture in Southeast Asia –Part I–*, 1992.

Studia Culturae Islamicae

1. NAKANO, A., *Basic Vocabulary in Standard Somali (I)*, 1976.
2. MIKI, W., *Index of the Arab Herbalist's Materials*, 1976.
3. YAJIMA, H., *The Arab Dhow Trade in the Indian Ocean*, 1976.
4. NAGATA, Y., *Some Documents on the Big Farms (Çiftlik) of the Notables Western Anatolia*, 1976.
5. MIYAJI, K., "Kaçem Ali"—*Monographie d'un domaine autogéré de la plaine de Mitidja (Algérie)*, 1976.
6. MIYAJI, M., *L'Émigration et le changement socio-culturel d'un village Kabyle (Algérie)*, 1976.
7. MIKI, W. & 'Abd al-Raḥīm, *Village in Ottoman Egypt and Tokugawa Japan—A Comparative Study—*1977.
8. M. Salah Ahmed, HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Middle East*, 1979.
9. 上岡弘二, 家島彦一, インド洋西海域における地域間交流の構造と機能—ダウ調査報告 2—, 1979.
10. KAMIOKA, K., & YAMADA, M., *Lāri Basic Vocabulary –Lārestānī Studies 1–*, 1979.
11. NAGATA, Y., *Materials on the Bosnian Notables*, 1979.
12. SHIMIZU, K., *Bibliography on Saljuq Studies*, 1979.
13. HANEDA, K., *Tabrizi Vocabulary, an Azeri-Turkish Dialect in Iran*, 1979.
14. NAKANO, A., *Report on Moroccan Urban and Rural Life 1—Ethnographic Texts in Moroccan Arabic—*, 1979.
15. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (1)*, 1982.
16. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn (D. 1139 A. H./1727 A. D.) Vol.1(Arabic Text), Ed. & Notes*, 1982.
17. NAKANO, A., *Somali Folktales (1)—Texts in Somali [1]—*, 1982.
18. NAKANO, A., *Folktales of Lower Egypt (1)—Texts in Egyptian Arabic [1]—*, 1982.
19. BELLAKHADAR, J., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in the Maghrib*, 1982.
20. YAMAGATA, T., *Coptic Monasteries at Wadi al Natrun in Egypt—From the Field Notes on the Coptic Monks' Life—*, 1983.
21. BAYKARA, T., *Yatağan –Her Şeyi İle 'Tarihi Yaşatma Denemesi'—*, 1984.
22. YAJIMA, H., *The Islamic History of the Maldive Islands by Hasan Tāj al-Dīn, Vol. 2, Annotations and Indices*, 1984.
23. NAGHIZADEH, M., *The Role of Farmer's Self-determination, Collective Action and Cooperatives in Agricultural Development—A Case Study of Iran*, 1984.
24. ABDUSALAM, A., *The Rural Geographic Environment of the Syrian Coastal Region and the Shizuoka Region: A Comparative Study of Syria and Japan*, 1985.
25. ABDUSALAM, A., *Adighean (Western Circassian) Vocabulary*, 1985.
26. TSUGE, Y., *Ethnographical Texts in Amharic (2)*, 1985.
27. BAŞER, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Turkey*, 1986.
28. USMANGHANI, K., HONDA, G. & MIKI, W., *Herb Drugs and Herbalists in Pakistan*, 1986.
29. NAKANO, A., *Comparative Vocabulary of Southern Arabic (Mahri, Gibbali and Soqotri)*, 1986.
30. KAMIOKA, K., RAHBAR, A. & HAMIDI, A. A., *Comparative Basic Vocabulary of Khonjī and Lārī—Lārestānī Studies 2—*, 1986.
31. 家島彦一, *Arwād 島—シリア海岸の海上文化—*, 1986.
32. TAKESHITA, M., *Ibn 'Arabī's Theory of the Perfect Man and Its Place in the History of Islamic Thought*, 1987.
33. HAYASI, T., *A Turkish Dialect in North-Western Anatolia—Bolu Dialect Materials—*, 1988.
34. PARSINEJAD, I., *Mirza Fath Ali Akhundzadeh and Literary Criticism*, 1988.
35. SATO, T., *The Syrian Coastal Town of Jabala—Its History and Present Situation—*, 1988.
36. 家島彦一, 上岡弘二, イラン・ザグロス山脈越えのキャラバン・ルート, *IRANIAN STUDIES 1*, 1988.
37. 上岡弘二, 羽田亨一, 家島彦一, ギーラーンの定期市—1986年度予備調査報告—, *IRANIAN STUDIES 2*, 1988.

38. HAKAMI, N., *Pèlerinage de L'Eimâm Rezâ—Etude Socio-économiques—*, 1989.
39. HONDA, G., MIKI, W. & SAITO, M., *Herb Drugs and Herbalists in Syria and North Yemen*, 1990.
40. OHTA, K., *The History of Aleppo—Known as ad-Durr al-Muntakhab by Ibn ash-Shihna—*, 1990.
41. Raouf Abbas Hamed, *The Japanese and Egyptian Enlightenment—A Comparative Study of Fukuzawa Yukichi and Rifā'ah al-Ṭahṭāwī*, 1990.
42. YAMAUCHI, M., *The Green Crescent under the Red Star—Enver Pasha in Soviet Russia 1919—1922*, 1991.
43. NISHIO, T., *A Basic Vocabulary of the Bedowin Arabic Dialect of the Jbāli Tribe (Southern Sinai) — Studia Sinaitica I—*, 1992.
44. 日高英實, イラン現代政治年表 I : 1946年 3 月—1949年 3 月, *IRANIAN STUDIES* 3, 1992.

African Languages and Ethnography

1. EGUCHI, P. K., *Miscellany of Maroua Fulfulde (Northern Cameroun)*, 1974.
- *2. MATSUSHITA, S., *A Comparative Vocabulary of Gwandara Dialects*, 1975.
3. MOHAMMADOU, E., *L'Histoire des Peuls Férôbé du Diamare Maroua et Pétte*, 1976.
4. EGUCHI, P. K. (tr.), *Shi'r al-Ṭūba (Poem of Repentance)*, 1976.
5. WADA, S., *Hadithi za Mapokeo ya Wairaqw (Iraqw folktales in Tanzania)*, 1976.
6. NAKANO, A., *Dialogues in Moroccan Shilha (Dialects of Anti-Atlas and Ait-Warain)*, 1976.
7. TANAKA, J., *A San Vocabulary of the Central Kalahari-G//ana and G/wi Dialects*, 1978.
8. MOHAMMADOU, E., *Les Royaumes Foulbé du Plateau de L'Adamaoua au XIX^e siècle*, 1978.
9. MATSUSHITA, S., *In a Small Town on the Benue—Fula Texts from Gongola State, Northern Nigeria*, 1978.
10. HINO, S., *The Classified Vocabulary of the Mbum Language in Mbang Mboum—with Ethnographical Descriptions*, 1978.
11. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon I*, 1978.
12. MOHAMMADOU, E., *Catalogue des Archives Coloniales Allemands du Cameroun*, 1978.
13. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon II*, 1980.
14. MOHAMMADOU, E., *Le Royaume du Wandala ou Mandara au XIX^e Siècle*, 1982.
15. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon III*, 1982.
16. NAKANO, A., *A Vocabulary of Beni Amer Dialect of Tigré*, 1982.
17. MOHAMMADOU, E., *Peuples et Royaumes du Foubina*, 1983.
18. EGUCHI, P. K., *Fulfulde Tales of North Cameroon IV*, 1984.
19. KAJI, S., *Deux Mille Phrases de Swahili Tel Qu'il Se Parle au Zaïre*, 1985.
20. MOHAMMADOU, E., *Traditions d'Origine des Peuples du Centre et de l'Ouest du Cameroun*, 1986.
21. EGUCHI, P. K., *An English-Fulfulde Dictionary*, 1986.
22. MOHAMMADOU, E., *Les Lamidats du Diamaré et du Mayo-Louti au XIX^e Siècle*, 1988.
23. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.1*, 1990.
24. MOHAMMADOU, E., *Traditions Historiques des Peuples du Cameroun Central Vol.2*, 1991.
25. KIMURA, E., *Mabadiliko ya Kijamii na Riwaya ya Upelelezi Tanzania (Social Changes and Detective Novel of Tanzania)*, 1992.

Sudan Sahel Studies

1. TOMIKAWA, M. (ed.), 1984.
2. TOMIKAWA, M. (ed.), 1986.

African Urban Studies

1. HINO, S. (ed.), 1990.
2. HINO, S. (ed.), 1992.

Bantu Vocabulary Series

1. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Mwenyi Language*, 1987.
2. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nkoya Language*, 1987.
3. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lungu Language*, 1987.
4. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Lenje Language*, 1987.
5. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Nilamba Language*, 1989.

6. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Pare Language*, 1989.
7. YUKAWA, Y., *A Classified Vocabulary of the Luba Language*, 1992.
8. KAGAYA, R., *A Classified Vocabulary of the Bakueri Language*, 1992.
9. NAKAGAWA, H., *A Classified Vocabulary of the Ha Language*, 1992.

Bantu Linguistics (ILCAA)

1. *Studies in Zambian Languages*, 1987.
2. *Studies in Tanzanian Languages*, 1989.
3. *Studies in Cameroonian and Zairean Languages*, 1992.

Boucle Du Niger

1. KAWADA, J.(ed.), 1988.
2. KAWADA, J.(ed.), 1992.
2. KAWADA, J.(ed.), 1990.

African Literature Series

1. WUFELA, Y., *Litterature et Politique en Afrique Noire*, 1992.
2. WUFELA, Y., *Litterature Africaine et Christianisation de l'Afrique Noire*, 1992.

Monumenta Serindica

1. IJIMA, S., (ed), *Changing Aspects of Modern Nepal—Relating to the Ecology, Agriculture and Her People*, 1977.
2. HASHIMOTO, M. J., (compl.) *The Newari Language—A Classified Lexicon of Its Bhadgaon Dialect*, 1977.
3. KITAMURA, H. (ed), *Glo Skad—A Material of a Tibetan Dialect in the Nepal Himalayas—*, 1977.
4. MATISOFF, J. A., *Mpi and Lolo-Burmese Microlinguistics*, 1978.
5. HOSHI, M. & Tondup Tsering, *Zangskar Vocabulary—A Tibetan Dialect Spoken in Kashmir*, 1978.
6. KITAMURA, H., NISHIDA, T. & NISHI, Y. (ed.), *Tibeto-Burman Studies 1*, 1979.
7. NAGANO, Y., *Amdo Sherpa Dialect—A Material for Tibetan Dialectology*, 1980.
8. NISHIDA, T., *The Structure of the Hsi-hsia (Tangut) Characters*, 1980.
9. THURGOOD, G., *Notes on the Origins of Burmese Creaky Tone*, 1981.
10. BISTA, D. B., IJIMA, S., ISHII, H., NAGANO, Y. & NISHI, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal*, 1982.
11. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Map—The Kingdom of Nepal*, 1983.
12. TACHIKAWA, M., MIKAME, K., HOSHI, M. & NAGANO, Y., *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal II*, 1984.
13. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Sikkim Himalaya—Development in Mountain Environment*, 1984.
14. MALLA, K. P., *The Newari Language: A Working Outline*, 1985.
15. ISHII, H., TACHIKAWA, M., NAKAZAWA, S., NAGANO, Y. & HOSHI, M., *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal*, 1986.
- SHARMA, P. R., 三瓶清朝, 山本勇次, ネパールにおける言語・文化・社会の動態, 1986.
16. SUN, J. T. S., *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: Ndzorge Šame Xyra Dialect*, 1986.
17. KARAN, P. P., PAUER, G. & IJIMA, S., *Bhutan: Development amid Environmental and Cultural Preservation*, 1987.
18. EINOO, S., *Die Cāturmāsya Odea Die Altindischen Tertialopfer Dargestellt Nach Den Vorschriften Der Brāhmanas und Der Śrautasūtras*, 1988.
19. SUWIG, T., *Two Essays on the Formation of the East Asian Ethnic World*, 1989.
20. FINCHER, J. H., *Chinese Democracy—Statist Reform, The Self-Government Movement And Republican Revolution*, 1989.
21. SEKINE, Y., *Theories of Pollution—Theoretical Perspective and Practice in a South Indian Tamil Village*, 1989.
22. SHIMA, I., *A Newar Buddhist Temple Mantrasiddhi Mahāvihāra and a Photographic Presentation of Gurumandalapūjā*, 1991.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in India

1. KARASHIMA, N., SUBBARAYALU, Y. & SHANMUGAM, P., *Land Control and Social Change in the Lower Kaveri Valley from the 12th Centuries*, 1980.
2. HARA, T. & KOMOGUCHI, Y., *Socio-Economic Studies of Two Villages Esnakorai and Perwalanallur, Lalgudi Taluk*, 1981.
3. 柳沢 悠, 南インド・カーヴェリ河流域の農村社会の史的变化——アバドゥライ村の土地所有関係を中心に——, 1981.
4. SUBBIAH, S., MIZUSHIMA, T. & NARA, T., *Socio Economic Studies of Two Villages; Mahizambadi and Neykulam, Lalgudi Taluk*, 1981.
5. NAKAMURA, H., *Disintegration and Re-integration of a Rural Society in the Process of Economic Development—The Second Survey of a Tank-based Village in Tamil Nadu—*, 1982.

Socio-cultural Change in Villages in India

1. KARASHIMA, N., *Pre-modern Period*, 1983.
2. *Modern Period* No.1 (HARA, T., MIZUSHIMA, T. & NAKAMURA, H.), No.2 (YANAGISAWA, H.), 1983.
No.3 (KOMOGUCHI, Y.), 1984.

Studies in Socio-cultural Change in Rural Villages in Bangladesh

1. HARA, T. & UMITSU, M., 1985.
2. FAROUK, A., 1985.
3. TANIGUCHI, S. & SATO, H., 1985.
4. ISLAM, S., 1985.
5. CHOWDHURI, A., 1987.
6. TANIGUCHI, S., 1987.
7. SATOH, T. & UMITSU, M., 1987.
8. FAROUK, A., 1987.
9. MOHSIN, K. M., 1990.

South Asian Monograph

1. KAWAI, A., *'Landlords' and Imperial Rule: Change in Bengal Agrarian Society C 1885–1940*, Vol.1, 1986,
Vol.2, 1987.
2. 水島 司, 南インド在地社会の研究, 1987.

AA-Ken Caribbean Study Series

1. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, 1985.
2. VERNON, D., *Money Magic in a Modernizing Maroon Society*, 1985.
3. YAMAGUCHI, M. & NAITO, M. (ed.), *Social and Festive Space in the Caribbean: Comparative Studies on the Plural Societies in the Caribbean*, Vol.2, 1987.

一般研究出版物

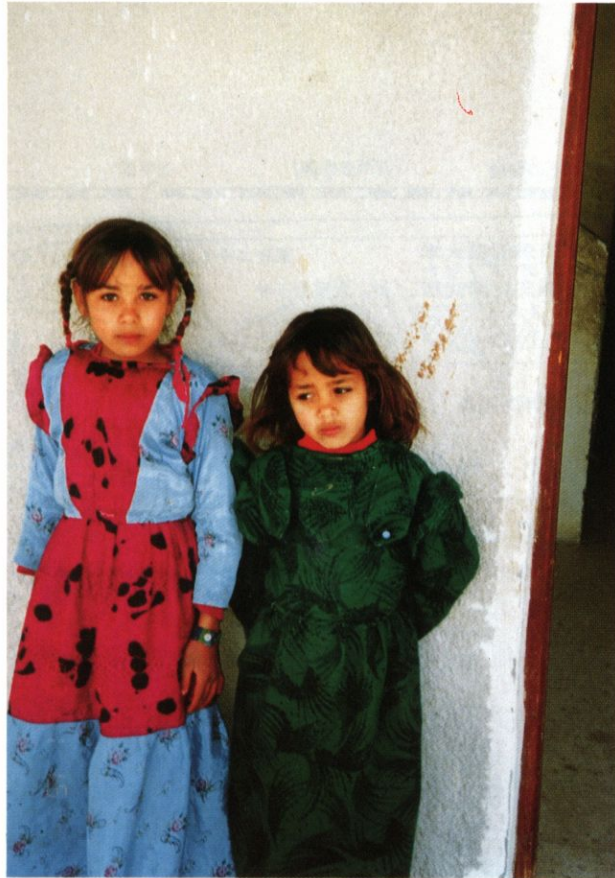
- 湯川恭敏, サンバー語動詞のアクセント, 1983.

コンピュータ マニュアル シリーズ

1. VSAMEDIT(テキストエディター)松下周二(1984).
 - *2. FONTMAKER(文字フォント作製・修正)今井健二(1985).
 3. BUNPOO(文法:文字コード変換)今井健二(1982).
 4. AAFE(文字フォントエディタ)今井健二(1985) [廃版]
 5. AATEDIT(各種言語テキストエディタ)今井健二(1985) [廃版]
 6. 辞書検索表示プログラム 松下周二(1986).
 7. TEDIT(フルスクリーンテキストエディタ)今井健二(1990).
 8. 電子辞書 DICSEARCH 松下周二(1992).
- 別冊 文字フォントリスト1(1992), 2(1988), 3(1992), 4(1991).

アジア・アフリカ言語データシリーズ

1. 坂本恭章編, 近世アンコール碑文—KWIC 索引, 1986.
2. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (1)*, 1987.
3. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (2)*, 1988.
4. SAKAMOTO, Y., *Austro-Asiatic Series—Khmer (2)* CBAP SREI, 1989.
5. MALLIK, B. P., NARA, T., SAKAMOTO, Y., *South-Asian Series—Bengali Language (3)*, 1991.



シナイ半島
ギリシア系というアイデンティティーをもつ遊牧民ジバリ族
の美少女二人 (顔つきが全く他のアラブ系と違う)。(西尾哲夫)



